

# TALK about~

齋藤 参郎 氏

福岡大学  
都市空間情報行動研究所長  
(福岡大学 経済学部 部長)



福岡都市圏を問わず、まちづくりを行ううえで「回遊性の向上」が重要視されている。福岡都市圏の2大拠点・博多地区と天神地区では現在、地元住民や経済界が中心となって新しいまちづくりへの議論が本格化しており、回遊性に重点を置いたビジョンも示されている。今後はその実現へ、具体的な施策に着手する時期に来ていると感じる。

道路が広くなってもその部分に魅力的な要素がなければ人通りはまばらなままで、ともすると拡幅前より閑散としている印象を与えてしまう。これは博多地区や天神地区も例外ではない。現在のにぎわいを維持しながら、魅力を高めるための要素をどのようにまちの中に導いていくかが重要となるだろう。

現在の福岡都市圏をみると、博多地区から天神地区までを歩く人は少ない。距離的には徒歩10分程度だが、1

## 「新たな集客施設が回遊性と経済効果を創出」

00円循環バスが好調なことや、両地区間にある大型の集客施設がキャナルシティ博多しかないことから、心理的に実際より長い距離に感じてしまうためだ。このため、両地区間に集客が多く見込める施設が整備されれば、心理的な距離感もなくなり、回遊性も飛躍的に向上するだろう。またそれは、経済効果という面でも大きな意味を持っている。

所長を務める福岡大学都市空間情報行動研究所では、福岡都市圏を訪れた1000-

2000人を対象に、訪れた施設や場所、支出額などについてのマーケティング調査を毎年行っている。それによると、都市圏への1日の来街者の平均は約32万人、年換算で約1億人となる。また1人平均4-5カ所の施設や店舗を回り、1カ所あたり平均1395-1596円を支払っていることがわかった。つまり、もう1カ所集客が見込める場所を増やせば、年間1億人が1500円程度を支払う計算

で、約1500億円の経済効果が見込めることになるわけだ。

都心では現在、大型商業施設の計画が複数予定されている。これらが完成後、集客を見込める新しい核となり、回遊性向上だけでなく経済面でも効果を見込めれば、福岡市全体のまちとしての価値、すなわち「都市エクイティ」も高まることになる。昨今の不動産市況は減退しているが、都市エクイティが高まれば、それぞれの不動産価値も高まることは間違いない。

支店経済と呼ばれる福岡都市圏では、これまで建築や都市計画、金融などそれぞれがその分野に特化し、景観面など全体的なまちのビジョンにまで話が及ばずにいた。ただこれからはまちをひとつの企業ととらえ、関係者が総力を上げてまちづくりに取り組む必要があるだろう。また、内部だけの意見だけでなく、多くの人が訪れる福岡都市圏だからこそ、県外や海外など外部からの意見も取り込み、福岡都市圏というブランドにさらに磨きをかけることが重要だ。